

鱗を知ることができればと、私は期待しているのである。この問題について、どなたかの文章が見られるかも知れないというのが、私の楽しみである。勝手なことを考えて申し訳ないが、そんな期待を含めると、些少でも御手伝いしないわけには行くまい。しかし、はじめにいったように、喜左衛門さんの没後にいくつか追悼文を書いたし、生前にも私の知る一面を述べたこともあるわけで、多少それらと重なるのを覚悟の上で、それでもできるだけ新しい角度で、この私にとって重大な人物の小さな影でもこのさい写しとめて置くことにしたい。

有賀喜左衛門の資質の形成

中村 吉治（遺稿）

信州における白権の運動の波は、私たちの小学生の間にやって来て、過ぎて行つたらしい。とにかく私には直接の思い出はないし、思いあたるふしもない。しかし、いつだつたか、信州白権事件の犠牲者の一人中谷勲氏と会つたとき、「先生なぜもう来ないのか」と聞いたら、「来ちゃいけないというのでな」と答えたのを覚えている。それだけのことであって、前後、何の記憶もないが、これだけのことをいつまでも私は覚えている。

喜左衛門さんとの「つきあい」は、私が中学生になってからである。小学生の私が喜左衛門さんから雑誌を沢山貰つたことがあるのを覚えてなつかしく別に書いたことがあるが、その頃は私の方が「つきあえる」年齢ではなかった。小学生としては赤羽の真金寺の坊さんが朝日小学校の体操場で話をし、いま世界で一番偉い人はトルストイだといって私たちをびっくりさせた記憶がある。明治大正の子としては偉い人は軍人のことだと思っていたから、これには驚いた。この坊さんは東京の大学を出て来て、われわれには当時何も

わからなかつたが、いろいろ新しいことをやつたために、評判が悪い人だつた。しかし、新知識であつたことは確かである。喜左衛門さんとは友人であつたかも知れないが、そのあたりはわからない。その頃、喜左衛門さんはまだ第二高等学校の生徒であつたはずであるが、交遊はあつたようと思える。中谷勲氏などが両方の友人であつたことは間違いない。そんなことがいろいろ断片的に浮かんでき来るが、まとまつてこうだといえることは私にはない。

喜左衛門さんが白樺の人たちと交渉のあつたことは、のちになつていろいろと知つた。喜左衛門さんは武者小路実篤に作品を見せてほめられたことがあるといい、その後、どこかで偶然再会したとき、もうあんな仕事はしていないのかと尋ねられたことがあつたといつてゐた。武者小路があの作品を覚えていてくれたよといつて、この話をしてくれたのは、私がもう大学生になつていた頃であつた。また、柳宗悦とも、民芸品を介したり朝鮮を介したりしてかかわりがあつた。それと柳夫人の兼子とも音楽か何かを仲立ちにして、やはりつきあいがあつたようである。しかし、武者小路の場合を別にすれば、喜左衛門さんの仕事や好みから、また、喜左衛門さんの話の中に名前が出てきたことから、私が類推しただけのことだ、喜左衛門さんの口からはつきりとその話を聞いたわけではない。何しろ喜左衛門さんにそういうつきあいがあつたと思われる頃は、私などがまだ子供で、話相手にはならなかつたし、辛うじて話相手になれた頃には、もうそうしたつきあいは喜左衛門さんにとって過去のことになつていて。しかし、有名人とのつきあいはとかく誇示されやすいもの、それほどの関係ではなくとも、過去のことでも、また聞か

れなくとも話したがるものだが、喜左衛門さんはそうした性癖はまったくなかつた。おかしくらいなかつたが、別にかくすというわけでもなかつた。こちらは中学生になり、また高校生になるにつれ、そんなことに興味が出て来て、何かと想像してみたこともあつたが、これ以上の話にはならない。それでもこんなことから、喜左衛門さんが白樺と、また白樺の人たちと何らかの交流があつたことはわかる。かなり深い関係であつたかも知れない。本当はこんなことを詮索してもしようがないが、喜左衛門さんの性格や行状の中に、それがどんな風に現れていたかということは大いに興味のあるところである。つまり、古い問屋ヤマキの長男として生まれ、その問屋は問屋としての活動はもうやめて、地主として落ち着いた伝統ある村の長老であつた父の喜左衛門さんから名前と家もろともに伝えられたに違いないわが喜左衛門さんの性格や行状に新しく付け加えられたものを、少しでも明らかにできればという希望があるから、乏しい痕跡ながらも探つてみたい気がするだけである。

痕跡は、私どもが大人になりつつある時期にもなにがしか見えかれていていた。武者小路との関係の深浅は不明だが、喜左衛門さんは一時期その家産の「解放」を思ったときがあつたらしく感じられたことがある。武者小路の新しい村や有島武郎の広大な土地の小作人への解放といったセンセーショナルな事件があつたのと重なつてくる。喜左衛門さんが音楽を好み、ピアノを買いこんで作曲まで試みたことは、自作の曲を中学生のわれわれに唄わせようとしたりしたことからはつきりしているが、その後に折角愛用していたピアノを小学校に寄付すると宣言したことがある。どうも喜左衛門さんが大学を卒業してから、私が高等学校に入る頃だったと記憶してい

る。当時、貴重品で、村の誰もがみたこともないピアノを寄付するというのだから、とうぜん話題になつた。このこととダブつて覚えているのは、私が三高に入り、フランス語を習つて二年目になった頃、喜左衛門さんに何か読むべきいい本を教えてくれと手紙を書いたら、早速リストを送つてくれた。それにマルクスの『共産党宣言』をはじめ、バクーニンやクロポトキンの書類冊のフランス語版があった。いかに好学でも、二年生にこうした本が読めるはずもないが、そのときは初等用かも知れないと思つて丸善へ行って聞いてみたら、怪訝な顔をされ、ないといわれたので、そのままになつてしまつた。あとで思い返すと不思議な氣はするが、白権の人たちには、当時バクーニンやクロポトキンなど無政府主義者のものが読まれていたようであるから、そんな影響があつてのことかと思う。そして、ピアノ一件もこういうなかでの生活と心理の反映だったのではないかろうか。寄付を宣言したが、一向に送つてくれぬと村の方でぶつぶつついているようなこともあつた。寄付はもうやめたのだという噂も流れたが、それは間もなく実現した。しかし、その間に思想や行動に不安定なところがあつたのかも知れない。私が学生になつて、喜左衛門さんにより近くで万事を導いてもらつた頃は、ものはやマルクスやバクーニンやクロポトキンの名前も著書も話題にすらなかつた。

柳宗悦を喜左衛門さんに関する連想するさい、藝術に対することはもちろんだが、重要なのは朝鮮問題である。喜左衛門さんは朝鮮に旅行したことがある。慶州石仏寺の見学が主目的だったと聞いている。大学の美学の卒業論文作成のためだったという。彼地で求めて来たという陶器の鉢と銅製の大きなスプーンを見せて貰つたこと

がある。そのスプーンをかざして、この美しさはどうだといわれても、私などハハンとうなづくだけだったから、張り合いはなかつたろうが、喜左衛門さんはそんなことでたじろぐ人物ではなかつたら、その美を説き、朝鮮美術全般に及んでやまなかつたことをおぼえている。そして、そうしたことは、最後まで変わらぬ喜左衛門さんの態度であつたが、そんな話のなかで柳の民芸運動のことがでくることもあつた。しかし、朝鮮問題は喜左衛門さんにとってもつと大きい意味があつたようだ。それはずっと晩年になつて聞いていたことでもある。この旅で喜左衛門さんは慶州のほか各地を訪れたらしいが、あげくに赤痢にかかるて入院したりして思わず長逗留になつたのはともかくとして、日本の朝鮮に対するやり口にことごとく腹を立てて帰つて来たとのことである。日本植民政策はもちろん悪いが、日本人の朝鮮人への対し方がよくないことをつくづく知つたということである。喜左衛門さんはこのことを何か運動に結びつけるようなことはしなかつたし、できもししかつたのだが、その心情に反権力の感情が濃くなつて來たようである。喜左衛門さんが私にマルクスやバクーニンやクロポトキンの著書を教えたのも、その頃だったと思えるし、ピアノを寄付しようとしたのも、自分の生活の見直しを考えたらしいのも、こんなことが作用していたかと思うのである。

なつた。白樺からも離れたようだが、これは嫌つてはいなかつたようである。しかし、社会主義は単に離れたというだけではなく、

嫌つたし、憎んだといつてもよい。なぜそうなつたのか、いぶかしいくらいのものだつたが、一時期それに心を寄せていただけに反動が大きかつたのかも知れない。そういう話、それだけの例ならいくらでもある。しかし、喜左衛門さんは嫌うだけでなく、反対の筋を立てることに努力し、ある程度成功した。それは反動的言辞を弄するというのではなく、積極的に自己を建設したのであり、喜左衛門さん自身はかなり満足したであろう。『日本家族制度と小作制度』にいたる研究である。地主・小作制度について、社会主義の主張するところを排し、自己の主意で体系づけたのである。单なる反動ではなかつた。これはあとでまた触れる。

白樺からの連想で、喜左衛門さんについてこんな風にみてきたが、その文学好きは自ら戯曲を書いたことからもわかるように、終生変わらなかつた。そういうなかで、人道主義はむしろ生得のものだつたろう。それが明らかに白樺に触れ、無政府主義に惹かれることで、性格を色つけたり、深めたりしたまでのことだつたろうと思う。そして、生得の性格が磨かれたのであるが、それがどう発揮されたかという過程については、実は私などは幼なすぎてよく分らなかつたというべきであつた。あとになつて右に述べたような片鱗に接しただけである。しかし、そこで分ることは、喜左衛門さんは常に自信をもつており、またいつも人に及ぼそうとしていたのである。教育者だったのである。私についていえば、やはり常に教えられる立場だつた。ただ、喜左衛門さんの場合、ナマの知識を「教」えるのではなかつた。基本的な文献を教えるくらいで、あとはその生活の

なかで悟らせるという風であった。それもまた生得の性質からだつたろう。

そうしたものを見得の性質とみるには、喜左衛門さんの家を知ることが必要であろう。ここでは私の見聞だけで、そのこまかいことはわからない。私は、第一、本来のヤマキの問屋活動の片はしも知らないのだ。ほのかにわかるのは、明治になってからの、平出宿廃止後のことである。しかし、考えてみれば、それも伝聞が多い。私の直接の見聞は明治も末年以降のことである。村では第一位の地主であつて、ゆつたりした先代の喜左衛門さんというのも、私が生まれて一年後の明治三九年に亡くなつてゐるのだから、直接おつきあいがあつたわけではない。ところで、先代の喜左衛門さんは、明治三年の生まれだから、生まれたときから平出宿は廃され、問屋として用はなくなつてゐるわけであるが、村の中心人物として学を好み、本を読み、多趣味な生活人だつたという。しかし、先代の喜左衛門さんは、それだけではなく、新時代のリーダーとしてさまざま足跡を残している。『上伊那誌』などによれば、明治二二年に平出英数学会をつくり、明治二三年には朝日青年同志会を組織して朝日小学校への高等科設置運動の先頭を切つた。明治三二年には平出銀行の発起に加わり、設立後には取締役になつて活躍するとともに、同年、朝日村学務委員として朝日尋常高等小学校の新築に尽力している。そして、明治三四四年に朝日村會議員に当選し、明治三六年には上伊那郡會議員になつてこれから一層の活躍が期待されたときに、三七歳で世を去つたのである。だから明治三〇年生まれのわれわれの喜左衛門さんは父の喜左衛門さんから生前に本格的な薰陶をうけていたはずはないが、家の伝承というべきものはきちんと受け継い

でいる。われわれの喜左衛門さんは父喜左衛門さんの前に早く実母を喪っていたから、必ずしも恵まれた幼年時代をおくったとはいえないけれど、不思議ともいえるほど生得の才幹を感じられた。不思議というのは、家の実務には幼少時に関係したはずもないし、中学生活からは寄宿生活に入り、休暇以外は平出の家に帰っていないにもかかわらず、郷土愛を強烈に持っていたことである。これはもう父喜左衛門さんと思いつかせて、家による伝承としかいいようがない。

『上伊那誌』に出てくる父喜左衛門さんの伝記は、実はそのままわれわれの喜左衛門さんが「家」を極端なまでに重視したのは、われわれの喜左衛門さんが「家」を極端なまでに重視したのは、「家」に恵まれなかつた喜左衛門さんが、それにもかかわらず、おのずからして「家」を得ていたからも知れない。

とにかく、そうした喜左衛門さんの資質は、白樺に由来するものではないと思うし、もちろん社会主義からは出て来ない。生得のものだらうというのは、それゆえである。自己の家・父祖から受け継いだものとみるべきである。多感な青年時代に、白樺に触れ、トルストイに感動し、日本の植民政策に腹を立て、社会主義に魅力を感じたり、というように、思想形成過程において身についたものたしかにあるだろう。いろんな思想が、渾然と喜左衛門さんの精神なかを通りすぎて、しかもいすれもが何ほどかの栄養分を残して行つたことは間違いない。それは思想というだけでなく、日常の生活態度一般に及んでいたし、趣味というには深すぎる美術の愛好ぶりなど、計算に入れがたいものを含んでいる。父喜左衛門さんには、啓蒙的活動家としての諸学習のほかに、読書・美術・茶の湯などにわたる広汎な好みがあつたそつだが、そういうものが遺伝するのか

どうか、私は知らない。しかし、喜左衛門さんはそうしたもののが遺伝をふまえた才能・嗜好が脈々として生きていた。そのさい、学校や友人やそのほか考へうるもの影響を説くこともできるかも知れぬが、とてもそんなものではないことを喜左衛門さんを知るものにはわかっているだろう。

このような遍歴のあとに、喜左衛門さんがぶちあつたのが、柳田國男とその民俗学だったようだ。その接觸がどんなぐあいだつたかは知らない。話したこともない。私が三高生でマルクスなどの著書を紹介されて驚かされたあと、大学生になる頃は、そんなことは何もなかつたように喜左衛門さんは民俗学者であり、博学家であつた。柳田國男を推奨すること、きわめて強いものがあつたが、これは喜左衛門さんの一特質、思いこんだら深くつきづめ、また人に語つてやまぬというところによるものである。その頃、ようやく私なども喜左衛門さんに相手にされるようになつたばかりであつたから、そう感じたのかも知れない。ただ、喜左衛門さんは推奨はするが、しかし是非やれという勧め方はしない。だから私が大学の国史学科に入ったのは、影響がなかつたといえば嘘になるが、喜左衛門さんに直接勧められたりしたからではない。私なりにそれがよさそうだと思って選んだのであるが、その結果を見て、喜左衛門さんは否定せず、勉学のことについていろいろと激励してくれたのである。もし進学の相談に行つていたら、喜左衛門さんは自分に執して宗教学あたりを勧めてくれたかも知れぬ。もっとも、私の場合、喜左衛門さんの意にかけ離れた選択をしていたとしたら、喜左衛門さんはきっと文句をいつただろうと思う。なぜなら、喜左衛門さんは、相談すればいろいろ文句のある人であり、また、みずから持して強

い自信をもち、熱心に自己を主張する人でもあつたからである。そして、喜左衛門さんのそうした気質は、やはりすでにみてきたような、村にあっては長老・指導者、おおくの小作人をひきいた「大家族」の家長という位置において養われたものだったろうと思う。それはさておき、喜左衛門さんの柳田國男への傾倒は相当なものだった。たとえば、柳田流に小祠をのぞいて歩く。それはたしかに私などには面白いが、喜左衛門さんは、誰にも面白いと思って疑わないところがあった。だから、喜左衛門さんは中学生を連れて村のなかを歩く。家々の間取を調べて歩いたことがあった。帳面に線を引いて、これがイロリだの座敷だのと書いて行くと、何か今まで何気なく住んでいた「家」が意味ある生きものにみえてくるのが面白く、親類の家を分担して記してまわったことがある。この成果は『民族』に載った。どこの家にも仏間があるが、そこには大抵「不幸音信帳」が束になってかけてある。それを取り出して書き写したり、そこに出でてくる家々の関係を聞いてみると、えらい学問があるもんだと感心するようになり、親類中のものをがさがさとみて歩いたりもした。これもまとめられてやがて雑誌に載つた。だから、そういうわけなくても、真似をする奴がいくらも出て来た。面白いと思わぬ者にはついで来ないだけの話であつたが、そうしたことにもつともびつたりだったのは、小学校の先生たちだった。いつの頃からか、郷土研究ということばが流行し、研究とまでは行かずとも、それを口にする先生たちはいくらもいた。郷土研究という口当たりのいいことばの中味は大変むずかしい。口にするほどにはわからない。しかし、そのなかに入つて行くには、喜左衛門さんの流儀はまったく適切であった。理屈より先に、事実の面白さがあった。喜左衛門さ

んの、そして、わたしの家のある平出、伊那に『蕗原』の集団が生まれたのはそうしながらのことであった。しかし、その場合も『蕗原』同人が喜左衛門さんの影響のもとで方向を固めて行くとき、あくまで自主的なものとし、喜左衛門さんを代表とする組織化という形式も実態もとらなかった。喜左衛門さんは助言というより感想を述べるような態度に終始した。しかし、それは冷い軽い批評ではなく、熱が入っていた。自主性を重んじた上で喜左衛門さんは何かわりであった。『蕗原』の成長は、たがいに批評し、褒めあい、話し合うなかで、めざましかつたが、その間に、喜左衛門さんは同人を渋沢敬三や柳田國男に引き合わせた。そういうところは積極的であった。

このような喜左衛門さんも、戦後、開きなおつて教育にたずさわらねばならなくなつた。東大講師から東京教育大学教授になり、社会学を講じることになったからである。この社会学ということと喜左衛門さんのやってきた民俗学との関係は大変面白いが、そのうち周辺に文化人類学が流行し、やがて定着するようになつてきた。こうなつてくると、喜左衛門さんも學問の体系といつたものを考へなければならなくなり、『蕗原』同人を相手にしていたような態度ではすまされなくなつてきた。大学というところは、頭のいい奴もいるが、不熱心な単位稼ぎだけの奴も相手にしなければならない。学ぶことと知るということを大切にし、何かを教えることは不得手で、また、そうしたことを信条としていたかもしれない喜左衛門さんが、どんな風にして教壇にたつていたかは私にはわからない。しかし、現に優秀な社会学者を何人も育てたところをみると、優秀な教師だったと思うが、それは喜左衛門さんに教わった人にも聞くほか

あるまい。喜左衛門さんがみずからそういうことについて語ったことはない。しかし、優秀な門弟については楽しそうに自慢していたことはある。

いろいろな面から喜左衛門さんの人物の底を探ろうとしてきたが、結局、容易につかまることはできない。喜左衛門さんは大地主で、明治の開明派であつた先代喜左衛門さんの長男であり、その家の性格を一ぱいに底の柱として持つていたようである。長ずるにつれて、喜左衛門さんは白樺の人達の人道主義が大きく影響し、さらに社会主義の思想も影を落したが、そのいずれにも満足できず、柳田民俗学に到達したところで、あたかも青年期を終り、田舎らしい活躍をみせることになったのだ。そして、喜左衛門さんは幸福な結婚をした。内外ともに大人になつたわけだが、この結婚で新しく松本の大商人のもつ伝家の「文化」が合流した。到底その細部にわたって述べることはできないが、一つだけとてみると、喜左衛門さんが「家と家の縁組」を徹底的に主義としていたことは、みずから結婚の実質をふまえたものであり、それが生涯変わらず、戦後の自由恋愛時代にもびくともしなかったのは、その思想の底に自己の体験が息づいていたためとみられる。

喜左衛門さんは、こうして大人になり、その頃から科学的な方法ということに重点を置き始めたようだ。それは柳田民俗学があらわに出さなかつたことで、ひいて入りやすくはあっても弱いものになりがちだったなかで、あきたらなさを感じてきたからであろう。そして、また、ここで夫人の兄の哲学者池上謙三氏による科学理論、特殊科学の理論の練磨があつたと、私は信じている。

さて、喜左衛門さんの内面をのぞきながら、その生まれの持つた意味と、成長するにつれて、時代の変化や人間的な接觸の変遷のかで喜左衛門さん的人間性が形成されて来た道を何とかつきとめようという私の意図はどうやら不完全燃焼に終つたようだが、この稀にみる人物について将来にわたつて研究することは、あとに来た諸氏に必要だと思うし、そのためには何かのとつかわりになるかも知れぬと念願して、不本意ながら筆をおくことにする。